元気100歳時代

出征の夫戻らず…「生きるため」懸命に農業

マージャンで頭すっきり

大内　郁（おおうち いく）さん　97歳　長野市高田

「ロン（上がり）」「参ったなあ」。4日の昼下がり。長野市高田のデイサービス施設「高田がっこう」でマージャン牌を交ぜる音が響いた。

男性の利用者3人と卓を囲む大内郁さん(97)は「今日は運がいい。計算は人にお任せ。自分は頭を使わず成り行き任せだねえ」と笑った。

マージャンを始めたのは60歳のころ。友人に誘われ、いつも同じ顔触れの女性3人と打っていたが、70歳を前に1人が体調を崩してから遠ざかっていた。7年前、自宅近くの高田がっこうに通い始め、開いていたマージャン教室に誘われた。「役もすっかり忘れていた。下手だけれど、お金も賭けないし、手を動かしていると頭がすっきりする」。週2回の教室は会話も楽しむ場になっている。

同市高田で稲作と養蚕の農家に生まれた。9人きょうだいの一番上。幼いころ、暮らし向きは比較的余裕があり、「下の子の世話をするだけで、農作業をしたことはなかった」。珠算が得意で高等小学校を卒業後、簿記学校を経て市内の郵便局に就職した。

21歳の時、親族の紹介で上水内郡中条村（現長野市）出身の忠孝さんと結婚。忠孝さんが勤務していた横浜市の製油会社近くに住んだ。休日は潮干狩りをするなど楽しく過ごし、2女をもうけた。

しかし、1944（昭和19）年6月、忠孝さんに召集令状が届いた。「本土が戦場になってしまう。自分たちが守らなければ」と出征直前に言った忠孝さんは小笠原諸島の激戦地、硫黄島へ。帰郷した郁さんには、しばらくの間、無事を伝える手紙が届いていたが、45年3月、日本の同島守備隊が玉砕したニュースをラジオで聞いた。

遺骨もなければ、戦死の通知もない。「どこでどう亡くなったのかも分からなかったけれど、悲しんではいられなかった。とにかく生きていかなくてはと思った」。母親に娘2人を預け、人を雇って父親と1町歩（約1ヘクタール）の田畑を耕した。数年後に父親も体調を崩して働けなくなった。

農作業はほとんど経験がなく、農協の指導員に毎日電話をして施肥や消毒のやり方を聞いた。「言われたことを忠実にやっていたら、いつの間にかすごく良いコメやリンゴができるようになり、驚かれた」。50歳を前に田畑は弟に任せ、製材会社や不動産会社の事務職として70歳前まで働いた。

趣味のマレットゴルフと家庭菜園は昨年引退。マージャンのほか、庭の花の世話も楽しみだ。身の回りのことは自分でできるし、近所なら歩いて出掛ける。同居する次女(70)に最近、「103歳まで生きたら東京オリンピックが見られるね」と言われた。

郁さんは「前回の（1964年の）東京オリンピックのころは働きづめで、開かれていることさえ知らなかった」と振り返る。「2020年まで元気でいられるか分からないけれど、マージャンをしながら楽しく生きていたいですね」

（田中　陽介）

（第2、第4、第5日曜日に掲載します）

高田がっこうでマージャンを楽しむ大内さん

健康長寿3カ条

一、転ばないよう気を付ける
一、好き嫌いせず食べる
一、毎日体を動かす

大内　郁さん　大正5年生まれ